

町並み保存の歩み そしてこれから

今や「まちづくり先進地」として全国的に名を知られるようになった内子町。その出発点となったのは、昭和50年ごろから始まった八日市護国地区の町並み保存運動でした。30年余りにわたるその歩みの中に、あらためてまちづくりの原点を探るとともに、これからの町並み保存を考えます。

八日市護国の町並み

八日市護国地区は、肱川の支流である小田川、中山川、麓川の合流地点に開けた旧内子地区の市街地にあり、金比羅参りや四国遍路などの交通の要衝として古くから栄えたところでした。とりわけ江戸後期に製蠟業が発達し、文久年間（1861～1864）に芳我弥左衛門氏が蠟花式箱晒法を發明してからは、良質な白蠟の産地として隆盛を極めたといえます。旧街道沿いの約600軒の通りには、繁栄ぶりを物語る豪壮な蔵屋敷や町家が軒を連ね、当時の面影を今に残しています。

同地区は昭和57年、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

現在は、国内外から大勢の観光客が訪れる、県内有数の観光地となっています。
町並み保存運動の起り

戦後の日本では、経済成長の中で都市化が進み、各地がそれぞれの地域の個性を失いつつありました。その中で、妻籠をはじめとする国内各地で、「地域の個性や歴史を失わず、都会のまねではない、ここにしかない資源を守ろう」という運動が起り始めます。これを受けて昭和47年、文化庁は「第一次集落町並調査」を実施。ここに八日市護国地区の町並みがリストアップされたことをきっかけとして、内子町の町並み保存運動が本格的にスタートしました。

昭和50年、朝日新聞社が発行する「アサヒグラフ」に同地区の町並みが掲載され、多くのメディアに取り上げられるようになると、全国の注目を浴びて次第に町並み保存への意識が高まり始めます。一方で住民の間には、「伝統的な造りの町家は暗く、間取りが不便で、現代の生活に合わない」と、改築を願う声も多くありました。

町は、町並み保存の世界的な先進都市であるドイツ・ローテンブルク市の市長を招き、その取り組みに学ぶシンポジウムを開催。勉強会や学習会を開くとともに、プロジェクトチームを設置するなど、積極的に運動を支援してきました。

多様な価値観がある中、地道な運動の積み重ねによって少しずつ広がっていった町並み保存運動。そこに暮らす人々の思いに支えられて、今に続いています。



④昭和52年の護国地区の町並み。右側の道は旧・大洲街道
⑤現在の同地区の町並み。住民の理解と協力によって建物の修復、景観整備、電柱の撤去などが行われ、現在は多くの観光客が訪れる



1_昔ながらの重いしとみ戸。野間口勝則さんは毎朝、自宅隣の町家資料館の戸を開けている 2_まだ観光客もなく静かな早朝の町並みで、店先に商品を並べる河野博彌さん 3_町並み保存会の会員が毎月行っている清掃活動。小さな草もこまめに取り除き、タバコの吸い殻も一つ一つ集める



4,6_訪れる人のために、玄関前には花が飾られ、縁側には座布団が敷かれる 5_家の前に色とりどりの花を植え、朝晩手入れに精を出す宮岡チヨ子さん。今はゴミをポイ捨てされることなどもなくなったとか



7_市兼武志さん・スエ子さん夫妻は、三叉路に建つ家で床屋と左官業を営む。8_鏝絵職人でもある武志さんは、本芳我家当主とも親しく、平成15～18年にかけて行われた大修理の際には鏝絵の修復を担当した 10_修復した鏝絵の一つ。本芳我家の商標「旭鶴」 13_スエ子さんの開く床屋には常連さんが気軽に訪れ、おしゃべりを楽しむ



9_秋の恒例行事となった八日市町並観月会。以前は町が主催していたが、4年前から保存会が主になって開催している。通りには行灯が灯され、琴の演奏や女性会員手作りの月見団子でもてなす 11,12_団子に添える箸袋も女性会員の手製。和紙を折り、千代紙で飾り付け、喜ぶ顔を思い浮かべながら心を込めて作る



暮らしの中にある町並み

あたりまえの日常の光景を守る
住民の愛情が町並みをはぐくむ

心地よい昼下がりに、町並みを歩くと床几に座ってご近所さんとおしゃべりに花を咲かせる姿を見かけます。元気良くあいさつしながら通り過ぎる小中学生。自転車カゴに買い物袋を入れ自宅へと急ぐお母さん。やがて通り沿いの家からは夕飯の支度をする音が聞こえ、障子越しに温かな光が通りを照らし始めます。

八日市護国町並みの魅力は、そこにかつての歴史の面影と共に、今の時代を生きる住民たちの普段の暮らしが見えるところにあると言われています。

しかし保存運動のスタートから30年余りを経過した現在、同地区でもその他の地域と同様に住民の過疎・高齢化が進行し、約80軒の住宅のうち4分の1近くが空き家となっています。

また、自分たちの町並みが評価され、有名になったことを喜ぶ反面、観光客の増加によってゴミのポイ捨てやプライバシーの侵害、騒音、生活道路の不便などの問題が増え、不満も生まれ始めました。

「町並みの穏やかさ、素朴さを失わず、住んでいて良かったと思える町並みを子どもや孫に引き継いでいきたい」。住民の多くがそう願い、より良い町並みにしていくための試行錯誤を繰り返して、努力と工夫を積み重ねながら、日々を暮らしています。

守る、楽しむ、伝える—— 町並みの暮らしをつむぐ人々



伝統の和蠟燭を守り続ける
大森 太郎さん(内子9)

現在、町内でただ一人和蠟燭を作っている大森太郎さん。江戸時代に創業した和蠟燭屋の6代目当主として、200年の伝統を守り続けています。和蠟燭は、ハゼの実から搾った熱い蠟を、竹串に和紙などを巻いて真綿で止めた芯に、何度も何度も塗り重ねて作ります。そのため断面は木の年輪のようになり、大きくて温かみのある炎と、蠟が垂れずに長持ちするという特徴があります。家業を継いで丸20年になるという大森さん。「始めは5代目の後ろに座り、すべて見よう見まねで覚えた」と言います。今春からは息子さんが戻り、7代目として修行を始めました。「技術は経験と手のひらの感触で身に付けるしかありません」と語る大森さん。次は自らの背中で伝統を伝えます。

誇れる町並みを
未来の子どもたちに



八日市護国町並保存会 会長
神山 美雄さん(内子11)

町並み保存運動の中心を担う「八日市護国町並保存会」。歴史的な文化遺産を守りながら、住心地の良い環境をつくり、文化的な暮らしを保全しようと、同地区に住む約80世帯・200人が中心となって昭和61年に結成しました。

みんな自分たちの町並みに誇りと愛着を持ち、訪れる人にもその魅力を感じてほしいと思っているのです」と話します。5年前からは「住民の高齢化が進む中、より積極的な女性の参加が不可欠」と、女性部を設置。女性ならではのセンスや気づかいを生かして活発な活動が展開されているそうです。

4代目会長として、10年間にわたり同会の活動を率いてきた神山美雄さんは「発足当時は反対意識もあり、活動は困難だったと聞きます。しかし今は町並み保存の意識が浸透し、会で毎月行う清掃活動のほかに、各人が日常的に通りを掃除したり、玄関前を美しく整えたりするようになりました。わたしたちは

「住民の我慢ばかりが増えたのでは保存運動は続きませんが、子どもたちに自慢の町並みを残すためにも、これからの保存の在り方を考えていかなければ。そう語る表情には、町並みに暮らす覚悟のようなものが見えました。」

暮らしを楽しみ、まちづくりに関わる
芳我 律子さん(内子11)



結婚後、町並みに暮らし始めて14年目になるという芳我律子さん。当初はその歴史も住む人も知らず、町並み保存にも無関心だったと言います。それが周りの人たちに誘われて少しずつ関わっていくうちに、「いつのまにかどっぷり」。今では町並み保存会の事務局長を務めると共に、女性部のメンバーとしても活躍しています。「決して積極的に飛び込んだわけではなく、周囲に巻き込まれただけ」と話す芳我さん。「でも伝建地区に住む以上、町並み保存問題からは逃れられない。だったら嫌々ではなく楽しんでくれる人がいて良かった」と言います。「わたしは関わり始めたばかり。大変だけど、周りの人たちと共に目指すものがあるのはうれしい」と笑っていました。

訪れる人に、町並みの魅力を伝える
町並みガイドの会 会長 久保 正憲さん



町並みを訪れる人にボランティアで案内役を務める町並みガイドの会。「少しでも町並みの魅力が伝わるように」と、時代背景や文化的価値などを分かりやすく説明しています。現会長を務める久保正憲さんは、入会のきっかけを「ある時、観光で訪れた人に町並みのことを尋ねられ、何も答えられなかったから」と話します。「せめて自分が住む町のことをお伝えできるように」と始めたガイド。しかしその奥は深く、調べるほどに新たな疑問が生まれて、今も勉強の途中だそうです。「ただ見ると、少しでも知識を持って見るとでは、受ける印象が大きく変わる。訪れた人に『来て良かった』と思ってもらいたい」。そう願うガイドさんの存在もまた、町並みの魅力の一つとなっています。

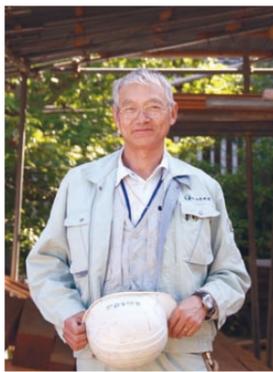
町並みを守る技術を残す

平成18年に完成した本芳我家住宅修理事業に続き、現在行われている上芳我家住宅修理事業の施工を請け負う(株)山本建設。同事業は20~23年度の予定が進められており、前田功一さんは同社の現場代理人として、第1期の解体作業などを担当しています。

「重要文化財である上芳我家の修理は、元の部材をできるだけ使わなければいけないため、解体に最も気をつかう」と言います。取り外した部材はすべて番号を付け、一つ一つ状態を確認しながら修理。修理できないものは、可能な限り元のものに近づけるように作り直します。「さすがに材も良いものを使ってあり、柱の接ぎ手なども非常に複雑。すべて手作業で行わなければならないが、その難しさこそが楽しさでもある」と前田さん。「修理に関われたことが自分の誇りになる」と語っていました。

修理に関わることが
自分の誇りに

株式会社山本建設
技術者
前田 功一さん(福岡)



先人の知恵と技を生かす環境を

左官職人
矢野比佐司さん(内子11)

国の重要文化財に指定されている本芳我家や上芳我家をはじめ、町並みにある家壁の修復の多くを手掛けてきた



矢野比佐司さん。「時代の流れの中、自分は町並み保存に関わることができ、地域に育ててもらった」と語ります。

「この町並みの魅力は、昔ながらの技術で、見かけだけでない『本物』を保存しているところ」と話す矢野さん。「この建物の特徴でもある地元の土を使った浅黄色の漆喰壁など、地域の気候や風土には、当地で取れるものが一番適している。しかし多くの手間や費用が必要となるため、今はそれを望む人は少ない」と言います。「先人が残した貴重な技術を生かすのは環境。効率性や経済性ばかりが優先されるのではなく、本物を残すことの価値に気づき、人々がそれを求め、実行できる環境が必要」と強く訴えています。

住む人も、訪れる人も 心地よい町並みを目指して



八日市護国伝統的建造物群保存地区見直し調査委員会 会長
西山 徳明 北海道大学教授



これからの町並み保存を見直すために

——八日市護国町並み保存計画見直し調査を実施——

町並保存センターでは、平成20・21年度の2カ年をかけて、八日市護国町並みの保存計画見直し調査を実施しました。

最初の計画ができてからすでに30年近くが過ぎ、人々が活躍する舞台としての町並み景観は美しく整備・保存されてきました。しかしこれからの、2度目、3度目の家屋修理や新築家屋の修景などを通じて、より魅力的な町並みにするにはどうすれば良いか、そしてさらに大切なこと、どうすればこの町並みに住み続けたい、住んでみたいという人々を

増やしていくことができるかが重要な課題として浮かび上がってきています。

保存地区である町並みは、地域の人、国民、人類みんなのもので。しかし、まずは地域に住む人々が最も愛していなければ、訪問者も魅力を感じません。今回の調査報告書は、そうした地域の方々に八日市護国地区の魅力を見直ししてもらい、もっともっと町並みを好きになってもらうための教科書のもりで作成しました。どうか、ぜひ一度手に取ってみてください。

内子の35年 ——成果と課題

岡田 文淑さん(内子10)



内子町における町並み保存運動の35年を振り返ると、成果といえば、「八日市・護国」という地域、そして「内子町」が、地域として認知されたことである。地域のアイデンティティを持つことがこれほど誇らしく、かつ実感できる経験を持った。

そして、町並保存地区が一部の観光資源にとどまらず、市街地を取り巻く山間地域との深い関わりの中に存在することを知り、山間地域の活性化が市街地の活力を生む原動力になるべきことを、歴史の教訓として学ぶことができた。

町並保存運動から始まった観光振興は、年間に数十万人の観光客を誘引するまでに成長し、愛媛県の中の観光地としての中核的な地位を築き、内子町に新しい産業化への夢と期待を町民に提供することにつながった。今日の町並保存地区は、土曜、日曜ともなると多くの観光客が狭い街路をひしめき合い、生活者としての住民にとって暮らしの環境が壊される。まさにマス・ツーリズムのための観光地になってしまい、保存地区住民が汗してつくり上げた貴重な資産が破壊される危機すら生じようとしている。

内子町における町並保存運動は、観光振興が優先されたことにより、「暮らしの環境」「歴史的環境の保全」といった都市計画の確立をはじめとして、伝統的な木造建築技術の進化と普及など、町並保存にとって一番大切なことへの取り組みが見失われた。

町並み保存運動とは、地域の再生のためのものである。再生の担い手は「人」、にもかかわらず高齢化の現実を避けて通れない。空き家を守る仕組みづくりもまた町並み保存運動である。そして「持続可能」という視点で自らのまちを考え、自らの力でコントロールできるコミュニティを形成したい。

町並み保存運動のあゆみ

- 昭和47年 ○文化庁第一次集落町並調査実施
- 昭和50年 ○「アサヒグラフ」(朝日新聞社発行)で内子町八日市町並みが紹介される
- 「八日市町並保存会」「町並み研究会」発足
- 昭和52年 ○町並調査を実施
- 昭和53年 ○町単独による保存修理事業開始
- 昭和54年 ○役場内に町並保存対策プロジェクトチームが設置される
- 昭和55年 ○木蝨資料館「上芳我邸」開館
- 保存条例および保存計画を策定
- 昭和57年 ○内子町八日市護国地区が「重要伝統的建造物群保存地区」に選定される
- 昭和58年 ○愛媛県文化の里「木蝨と白壁の町並」の指定を受ける
- 昭和60年 ○内子座修理復元工事竣工
- 昭和61年 ○「八日市護国地区町並保存会」発足
- 内子八日市護国地区道路が「日本の道100選」に選ばれる
- ドイツ・ローテンブルク市長を招きシンポジウムを開催
- 昭和62年 ○内子中学生を対象に「第1回蠟燭り体験学習」を実施
- 第1回観月会を開催
- 昭和63年 ○山本有三記念「郷土文化賞」受賞
- 平成元年 ○建設省「手づくり郷土賞」受賞
- 八日市護国地区で電柱を撤去
- 平成2年 ○大村家、本芳我家、上芳我家の国の重要文化財に指定される
- 内子町歴史民俗資料館「商いと暮らし博物館」開館
- 平成3年 ○内子および周辺地域の製蠟用具1,444点が重要有形民俗文化財に指定される
- 平成4年 ○「サントリー地域文化賞」受賞
- 平成6年 ○「都市景観大賞(景観形成部門)」受賞
- 平成12年 ○八日市・護国町並保存センター開所
- 平成13年 ○内子町が「優秀観光地づくり金賞総務大臣表彰」を受賞
- ドイツ・ローテンブルク市と友好都市盟約を締結
- 内子町の町並みと和蠟燭が、環境省「かおり風景100選」に選ばれる
- 平成17年 ○「上芳我邸」入館者100万人達成
- 平成18年 ○本芳我家住宅修理工事完成
- 八日市護国地区が国土交通省「手づくり郷土賞大賞部門」を受賞
- 平成19年 ○八日市護国地区が「美しい日本の歴史的風土100選」に選ばれる
- 内子地区が「都市景観大賞美しい町並み優秀賞」を受賞